

# 児童と社会を結びつける新聞活用

指定校 1 年次 安曇野市立三郷小学校 佐原 健治

## 1 本校の N I E の実態

長野県一の児童数を抱える三郷小学校では、N I E 指定校となる前年度の総合的な学習の研究会において、「新聞を取り入れた実践を行う」ことから、本格的な N I E への取り組みが始まった。研究テーマを「社会と自分とのつながりの役割を果たす新聞」と設定し、とにかく自分自身のことに意識が傾倒しがちな児童に、新聞を通して身のまわりの様々な出来事から、新聞を通して自分自身と社会とのつながりや興味関心のある事象を見つけ、更に追究を深める学習を行い、児童一人ひとりが意欲的に活動する姿を見せた。

本年度実践を行った 6 年の 1 クラスは、学級児童数 33 名のうち、新聞を全く取っていない家庭が 4 軒、そして地域限定の情報新聞のみをとっている家庭が 3 軒と、2 割近くの家庭が一般紙を取っていなかった。その理由を各家庭に聞いてみたところ、

- ・「新聞を読んでいる時間がないので、家ではなく勤務している職場の新聞で済ませている」…3軒
- ・「テレビでニュース番組を見てから、興味関心のある事象についてインターネットを利用している」…2軒
- ・「経済的な理由」…2軒

などであった。世間の趨勢として、各種メディアの発達により新聞購読率の減少が身近でも起きていることが分かった。また、一般紙を取っていない家庭は、全て核家族であったことも見逃せない。新聞を身近に感じる手立ての一つとして、家庭に新聞があるかどうかは重要なことのように思われる。

## 2 N I E 実践のねらい

本校では昨年度、新聞スクラップ活動を通して、社会と自分自身とのつながりを模索する研究を行った。この研究では新聞を社会と自分自身とを結びつける「窓口」と位置づけ、興味関心を追究して行くに従い、児童によっては新聞から離れる児童も見られた。(例：環境について新聞を窓口で学習を始めた児童が、ハイブリッド車の記事からさらに追究を深めるために、新聞ではなく、自動車カタログを読んだり、トヨタのディーラーに行ってインタビュー活動をしたりしながら、調査学習を深めた。)

本年度は、新聞と離れることなく、広く社会と自分との様々な結びつきについて、年間を通して継続的に追究したい。また、総合的な学習にとどまらず、他の教科への実践を試みるとともに、多くの先生方にも実践の波及を目指したい。

## 3 研究の概要

### (1) 実践した教科

- 総合的な学習：スクラップ活動、スクラップ新聞作り
- 国語：単元名「平和のとりでを築く」
- 道徳：モラルジレンマを取り入れた話し合い活動

「自分の家族が脳死状態になったとき、臓器提供を求められたらどうするか」

## (2) 新聞の提供状況

新規校かつ実践学級が3クラス以下だったので、9月より2カ月ごとの契約。毎週木曜日に総合的な学習の時間を設定し、その日は一週間の間にスクラップした記事を持ってきて気づいたことや考えたこと、さらに疑問に思ったことを記入した。ただし、2割ほどの児童が家庭で新聞を取っていないため、それらの児童は学校の新聞を与えたり、級友から新聞をもらったりするような配慮を行った。

## (3) 新聞を取り入れた実践をする上で、特に工夫をしたこと

### ① さりげない提示（押しつけない）

一番は新聞に対する抵抗感や嫌悪感を抱かせないことに配慮した。新聞スクラップ活動などで記事を読んでいる過程で、難解な用語については、辞書等で調べさせず、挙手をさせて教師が足を運び、意味を教えるようにした。辞書を使って調べさせることも試みたが、時間を浪費してしまうことと、子ども達が難解な内容の記事を嫌がることを避けるためである。また、年度後半になると、政治や経済面から記事をスクラップする児童が多くなってきたため、テレビのニュース解説番組を録画し見せることで、新聞記事の内容を理解しやすくするようなことも試みた。

### ② 拡大コピー機の活用

当初は教室の入り口に新聞の一面や、教師の側から特に見てもらいたい内容について掲示した。興味関心のある児童が集まって、記事のリードや本文を読んでいたが、より印象づける為に、特に教師の側が児童に読んでもらいたいと願う記事は、感熱紙の拡大コピー機を利用して、段ボール板に貼り付けて掲示した。



### ③ 「ついで」をねらい、興味関心を引きつける

新聞を机の上に置いて提示する時に、新聞の一面にあまり興味関心を示すことが期待されない記事が掲載されていた新聞には、「テレビ欄」や「スポーツ面」を開いて展示するように心がけた。すると、テレビ欄を開いておくと女子が、スポーツ面を開いておくと男子が、それぞれ新聞に手を取る傾向が見られた。

その際、休み時間等で、時間がある時にはついでに、他面を見ようとする姿が見られることに気づいた。大人も同様であるが、時間に余裕があると普段読まない面にも目を通そうとするものである。児童も児童の興味関心を引きやすい面を開いて展示することで、自分と新聞との関わりを広げるきっかけになってもらえたのではないだろう



か。

#### 4 N I E 実践の内容

##### (1) 総合的な学習：新聞スクラップの実践

N I E 実践の根幹。児童に新聞を見させる機会を与える。信濃毎日新聞社からいただいた「スクラップブック」を活用した。また、帰りの学活等で自分のスクラップを紹介する時間を設定する。記事の要約と気づいたことや考えたことを発表させることで、表現力を高めるねらいがある。

(2) 道徳：児童の新聞スクラップから、道徳的価値をゆさぶるモラルジレンマの授業設定ができそうな題材を取り上げ、道徳の授業で扱った。

##### ①授業の様子から

学習問題：「自分の家族が脳死状態になったとき、臓器提供を求められたらどうするか」



H児のスクラップした記事を窓口に、今回の授業を設定した。児童にいきなり「家族の臓器提供についてどう考えるか」問いかけても、脳死による臓器提供について制度の学習や、生活経験からだけでは、切実感を持って判断することは難しい。できるだけ、その状況に直面した立場に立って判断することができるようにする為の手立ての一つとして、教師の側がスクラップしておいた新聞記事を利用した。



新聞記事の良さは、記事の内容に関わった人々のコメントが記載されており、さらに記者によって要点的にまとめられているので、児童にとっても大変読みやすく、分かりやすい。記事の本文はさることながら、このコメントが、児童にとっては切実感を持って学習問題に迫るために大変効果的で、自己決定するための判断材料としても、コメントの部分からその根拠を求めている児童がほとんどであることがわかった。



このように、新聞記事に掲載されている人々の想いと、自分の家族が脳死状態になった時の状況を重ね合わせ、全ての児童が賛否両方の立場を示しながら、活発な話し合い活動を行うことができた。

今回の授業は、「家族の死」が大きなテーマになっていたが、学級内には身内の死に立ち会った児童が3名いた。その中の1人であるH児は、今回の脳死移植改正法の記事をスクラップしていて（このスクラップ記事が今回の授業の窓口になったわけであるが）、彼は生活経験から自

分の家族の死と重ね合わせ、臓器提供に対して「反対」の意思を示していた。だが、「賛成」の立場を示した児童の考え方を聴く過程を通して、「心が揺れた」と学習カードには書いてあり、事実授業中も、賛成の立場の発言に、悩みを増す表情を示した。だが、最後には「やっぱりお

ばあちゃんのことを考えると、反対だ」と意見を変えることはなかった。このような姿からは、新聞記事のような間接的な情報よりは、直接経験の方が児童にとっては判断材料としては強く作用していることがわかる。

## ②授業場面で用いた新聞記事について

今回の授業に当たり、教師の側でも家族の脳死移植についての記事をスクラップした。この問題については、授業者も学生時代から興味があり、記事をスクラップしていたこともあり、臓器移植改正法についての記事資料はある程度整っていたが、読売新聞や朝日新聞などにも連絡を取り、移植法成立時の記事を郵送してもらった。その際、学校の授業で扱う旨を伝えたところ、料金以上の様々な記事を用意して下さり、大変有難かった。

今回の記事は読売新聞の「脳死移植 希望と不安【読売新聞 2009年7月14日】」という主見出しの記事を中心資料とし、家族の脳死移植に対する賛否について話し合いを行った。この記事は、移植法改正に関わる様々な人々の想いを、賛成反対両面の立場から公平な視点で記載されているので、児童にとっても比較しやすく、理解しやすい構成であった。

また、コメントが多く載っているので心情面でも寄り添いやすい内容であった。実際記事に載っていてコメントを、それぞれの立場から拾い上げてみると、

ア：賛成の立場を示した児童の根拠となった記事のコメント

「我々のような悲しい思いをする患者や家族が減ってくれば」  
「移植医療は家族にとって希望の光」  
「本人の体がどこかで生きていてくれればいい」  
「今は弟が形を変えて生きていると思え、後悔はない」

イ：反対の立場を示した児童の根拠となった記事のコメント

「(脳死状態でも)人工呼吸器をつけながら、四歳で心停止するまで、髪の毛も爪も伸び、身長は10cm以上伸びた」  
「家族の死を目の前に、臓器提供を考えることはつらい」  
「(脳死になった)弟の思いは全く分からない。どうしたいのか、何を望んでいるのか何度も考えた」

今回の道徳の授業では、公開授業だったため大勢の参加者がいたにも関わらず、普段の授業以上に大変活発な意見交換が見られた。これもやはり新聞記事を利用した授業を通して、児童一人ひとりが「切実感」を持って授業に参加できた結果であったと思われる。



### (3) 国語：六年生「平和のとりでを築く」【職員の仲間作り】

公開授業の後、同学年の先生から新聞を取り入れた学習の要望があり、どのような場面で取り入れられるか相談した。国語の単元で「平和のとりでを築く」があり、教科書で学習した後、現在起きている世界の様々な争いについての記事を持ってきて、要約し、自分の意見を発表する会を行った。本単元は、「平和」に関わる材料を自分自身で集め、自分の考えを持ち、発信していく授業である。インターネットなどの活用も考えられるが、様々な情報を目にすることができる新聞が、材料選択場面においては好都合であり、多人数で同時に見合うこともできる点が良い。


**「力にたよらず」**

みなさん、日本が平和のために決めた政策が今変わろうとしていることは知っていますか？それは首相の諮問機関が提出した報告書に書いてありました。その報告書の中には、非核三原則や武器輸出三原則などの平和にかんする政策の手直しを求めているそうです。これが可決されると、日本も核兵器や武器を持ったりついたりして日本が平和ではなくなってしまうかもしれません。

その事について記事を書いた記者は、「北朝鮮の不正不法な砲撃はいけないことだが、それは軍事的な対応をエスカレートすることによって阻止できるのだろうか。日本の役割は軍事演習に参加することではなく、力によらない解決に向けて、米中両国とともに汗をかくことだ。」と述べています。

わたしもその思いに賛成です。日本がもしも核兵器をつくり戦争を起こしてもだれも幸せにはならないので、日本が平和のために決めた政策を変える必要はないと思うからです。

わたしは、国と国との問題は争いで解決するのではなく、力にたよらず冷静になり、どの国も平和に近づくように努力することが必要だと思います。




**「砲撃でおこること」**

みなさんは砲撃がどのようなことをするか知っていますか？

11月23日韓国・延坪島に北朝鮮が砲撃をしました。砲撃をされた韓国・延坪島の狭い集落には、あちこちに踏みつぶされたように家屋が倒壊した一角があったそうです。着弾地点から50m以上はなれた建物の窓ガラスも爆風で割れ、至る所に砲撃当時のこんせきが残っていた。時折、火事のような刺激臭が鼻を突いたと書かれていました。

船で島をはなれ砲撃をされないようにする人がほとんどだが、島に残る決意をする人もいる。特産品のワクリガニを販売する男性は、「再び砲撃をされる心配もあるが、仕事をしないと食べていけない。飢え死にするのも、砲撃で死ぬのも一緒です。」といていたそうです。

このように砲撃は人の家を壊したり、刺激臭をだしたり、人の生きる希望までもなくしてしまうものだと思うので、絶対に砲撃はやめてほしいです。



## 5 研究のまとめ

新聞を利用した価値について3つの視点から今年度の研究を振り返ると、

### (1) 「題材の今日性」

教材を選定する一つとして、できるだけ今メディアに取り上げられている記事を扱いたい。新聞だけでなく、テレビのニュース番組などでも取り上げられることが多いと、題材に対して児童も興味関心を持ちやすい。また、メディアに取り上げられることで、学校の授業時間以外にも家庭での話題にあげられやすく、家族と共に考える機会が持たれることが期待される。

### (2) 「記事に掲載されているコメントの切実感」

教科書に載っている教材資料は時にフィクションであったり、身近な問題ととらえにくい面があったりすることに対して、新聞記事は児童の意識として「新聞に書いてある情報は全て真実」であるという、題材に対する信頼感があること。記事の文章によっては難解で、読解できない児童もいるが、どの記事でもコメントは児童にとってもわかりやすい。また、切実感も伝わってきて、今回の道徳の授業では、記事のコメントを中心に児童の話し合い活動が深まった。政治・経済面は専門用語も使われていることが多いので、コメントも難しくなってしまうが、社会面や地域面は比較的どの児童にも読みやすく、理解しやすい。

道徳の公開授業では、家族の脳死状態での臓器提供について考える場面では、専門用語も多く、記事の読み取りに苦労した児童も見られたが、考えの根拠とする部分はほとんどの児童が「コメント」の部分を選択していた。

### (3) 「児童の興味関心に沿った題材選択」

高学年児童の中には、道徳資料を用いての授業に興味関心が薄れてしまう児童がいる。その一つに実際に起きた話であっても、資料化されるにあたり「フィクション」と思ってしまうからである。新聞記者は、実際に起きている話であることはもちろんであり、特に掲載されているインタビューのコメントは、実際に同じ社会に生きている人々の思いを要点的に記述してある。従って児童にとってはその人々の気持ちを理解しやすく、同時に想いに寄り添って自分のことのように「切実感」を持って題材に迫ることができやすい。

## 6 残された課題

### 家庭からの通信

一学期	修学旅行、土器、おひな作り、火おこし、おんぶの水泳、燃焼したフッカー、様々な経験をしていくのが楽しみです。生徒さんとしての表情で毎日過ごしている様子、嬉しく思います。
二学期	新聞記事をもとにした授業では自分なりにいろいろ考えられたようです。授業の様子や新聞に盛り喜んでいました。小學校卒業まであと3か月、お返しは(佐)

#### (1) 家庭との協力

NIE活動においては、家庭の協力が必要である。新聞をとっている児童ととっていない児童とでは、関わり方に違いが出てしまう。上は保護者からの通知表のコメントであるが、家庭でも親子で新聞を見る機会が増え、関わりが増えたとのことである。だが、新聞をとっていない家庭では、特に反応もなく、新たに新聞をとり始めた家庭はなかった。

#### (2) NIEへの教職員の理解

職員間でもNIE活動への関わりは差異がある。児童と同様に教師にとっても、新聞記事を取り入れる「必要感」がないと、新聞記事を利用しない。「言葉が難しい」「低学年には無理」と端から決めつけてしまう職員もいた。

#### (3) 記事下広告の配慮を

思春期を迎える男子児童、生徒は記事下広告の週刊誌の見出しに目がいってしまう。大きすぎる卑猥な言葉は少々気にかかる。